

編集室から

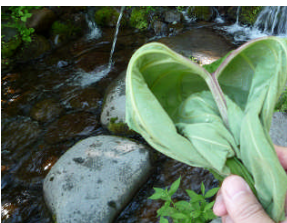
6月も九州・北海道・岩手と忙しく各地を周らせて頂きました。家庭料理・郷土料理を研究され、草の根の地域づくり活動をされている本田節さんを尋ねて熊本県人吉市に伺った時の事です。



いの一番にご案内頂いたのは、素晴らしい古社である青井阿蘇神社。ご説明を頂くと、なんとこちらにも龍神様を多く御祀りされている由。先月本欄でご報告しましたが、独り八戸市街を歩いて龍神様に巡り合わせた事を思い出し、一月余りの間に北と南でのご縁に思いを致しました。境内ではまさに江戸時代のお屋敷とお庭の復原中で、忙しく働いておられたボランティアの方々と宮司様の人間関係の素晴らしさを伺わせて頂きました。

節さんには、お忙しい中にもかかわらず手料理でおもてなし頂き、お話を聞かせて頂きました。また、御紹介頂いた農家民宿の「古時香（ことか）」さんではお迎え頂いたご夫婦が何故か初対面の気がせず、ご主人も僕の顔を見て同感との事。お話は夜半まで続き、人吉にも親戚ができた感激しました。

続いて、二度目の二戸市浄法寺町杉沢地区も、梅雨の最中というのに快晴。はやり素晴らしい皆様にお迎えいただき、感動の夜なべ談義。翌日、名水・岩誦坊で、自生している蔦の葉での呑み方を教えてもらいました。葉っぱがまるでハートのような。そのままでも美味しい水がより一層美味しく感じられました。



つづく

今月号の表紙写真は、昨年伊豆を訪れた際に駆けつけてくれたOさんに連れて行っていただいた柿田川湧水群です。透き通った水が昏々と沸き出る様に、思わず吸い込まれそうでした。ここを個人で守っておられる方のお話では、当初某企業の産廃捨場になっていたとか。それをたった独りでここまでされてきたご意思と行動力に前に、言葉が出ませんでした。

最近、若い女性の間でパワースポットがブームと聞きますが、二戸・岩誦坊と静岡柿田川の名水、八戸と人吉での龍神さまのご縁。水・気象と龍神様はご縁が深く、それは土地の力にもつながっています。

少し立ち止まって、何かを考え・思い出すべきなのかも知れません。（は）

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていたければと考えて編集しています。



2010/07

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

2010/07

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

文 月



静岡県柿田川湧水源にて
水面の奥に魚影が！

by hama

将来の夢は「吉本興業に入って人を笑わせたい」小学校の卒業式、皆の前で自分の夢を堂々と披露した。他の同級生がどんな夢を披露したのかは覚えていない。たぶん皆も同じく覚えていないだろう。しかし、小さい頃の記憶は今でも鮮明に蘇る。

現在、自分の故郷「熊本県球磨郡山江村」にある実家で生活をしている。陽気なのに真っ直ぐ人間な父親と、純粹で無邪気な母親（たまに無邪気すぎるが）、弟思いの兄の四大家族。杉松家では毎晩のように友人たちが集まり、自分たちの生き方や夢について語り合う。そこに球磨焼酎が入ると朝までゴースだ。あまりにも毎日のように車が数台家の前に停まっている為、近所では杉松家「山江村のドラツ」ハウスとまで呼ばれているようだ。笑える。

社会人になってから就職したいくつかの会社。そこには共通する一つのテーマがある。それは、地域づくりだ。二十歳のとき、社会人一年生で勤めた会社（有）プリズム。地元民放テレビ局の元プロデューサーだった岸本晃氏が立ち上げた会社で、映像による情報発信を軸に地域づくりの仕掛けを、自分の地元人吉球磨地域を中心に行っていた。住民自身がビデオカメラを持ち、企画、取材、編集、番組づくりを住民自身が総合的に行うという独自の手法（住民ディレクター）。この番組作りのプロセスを住民自身が経験することで、地域資源の再発見や、地域の魅力に新たに気付き、地域づくりのきっかけとなるというものだ。被写体は自分の地域・人なので、知り合いや友人、地域と自分自身の関わりがストレートに映像を通して伝わってくる。日々の生活にリハールサルや本番はないので、収録にも撮り直しはない。番組づくりが目的ではない。

く、地域を豊かにすることが目的だからだ。

そして現在勤務しているのは、熊本県人吉市にある郷土の家庭料理ひまわり亭。ここは地元のおばちゃんたちが元気に働く農村レストラン。テーマは「もったいない」。地域の流通にのらない食材もつたない。何よりも、家庭の台所を守ってきたおばちゃん・おばあちゃん達の知恵・経験・技がもつた「食」という思いから農村レストランを開業。代表本田節。「食」という地域資源を活かし「農村女性の自立」へとつながる自らの体験談を語る講演活動は、全国各地からの要望で年間の半分以上もスケジュールが埋まるほど。

そして、その活動の中で「家庭料理教室」を行うことがある。家庭料理の考え方を学ぶ研修として、その土地で採れる特産物を集め、即興でレシピを考えて料理しようというものだ。一気に十種類もの料理を提案する為、研修を受ける主婦たちは唖然とする。しかし、そこは家庭の主婦達。ふだんから台所に立ち「料理する」という作業は身体にしみついているので、いざ調理が始まるとアツという間に料理が出来上がってしまう。ここで大切なのは「家庭料理はこうあるべきだ」という概念をくずし、今ある材料をいかにして料理するか？という考え方を学ぶということ。つまりは即興から学ぶ。前に書いたプリズムでも同じ手法だった。私達は普段の生活の中で、いろんな物事を何気に対処している。その考え方や、行動のなかに「気付き」が生まれ、様々な視点から物事を判断できる力が「地域づくり」へと繋がっていくのでは？と感じる。（次号につづく）



【プロフィール】
（すぎまつ たかあき）一九八四年一月二九日生まれ。二〇〇四年大阪ビジネスアカデミー専門学校卒業後（有）プリズムに就職。二〇〇九年十月（有）ひまわり亭に就職。現在に至る。

濱のつばやき 『燈火の芯』

五月中旬に北海道を訪れた際、小樽に立ち寄った。数年ぶりの再訪だったが、街はかなり様子が変わっていた。観光地である道筋の繁華と、中心商店街の閑散とした空気のコントラスト。人通りの多い道も客層がすっかり変化してしまっているらしく、立ち並ぶ店舗はほとんどが「判り易い」モノしか並べられていない。

そんな中、街復興の当初から変わらぬ佇まいを守り続けている店がある。親切丁寧でも差し出がましさを感ぜない店員さん。接客のレベルは数段上がった。そこで、商品の一つに眼が釘付けになった。灯油ランプ。

意外に明るい光を放っているが、見つめていても眼に差す感じがしない。ほのかに揺れる灯火に時を忘れて見とれていた。

W杯の日本の戦いは終わった。延長の末のPK戦。次々と決めてゆく中、一人の選手の表情にハツとした。決めた選手は皆、プレッシャーの中にも決めて当然のような様子だが、この選手だけは違っていた。何か焦り・不安・怖れが全身に現れていた。彼が蹴ったボールは、ゴールを外れて行った。

彼を責めるつもりはない。むしろ、逆である。この一蹴から学んだ事は、抱いた不安に囚われるとそれ

を実現させてしまうという事。そして、それを招くのは心の弱さであるという事。それを教えてくれたことにむしろ、感謝したい。

地域づくり・街興しには、関わる地元の方が自身の手で掴み取った基本理念、つまりは芯が重要である。他所からあたえられたものでは、確信・信念にはなりにくからた。

最近、「相談を頂く街づくり・地域おこしの案件はどれも数段難しいものが多くなっている。

それに対して、年に数回の講演やワークショップでは、起こるもの・興る事も限られてくる。継続的に関わらせていただける新しい仕組みの必要性を感じつつも、少ない「縁」の中でも、かのPK戦のごとく、ゴールの前に立たなければならぬ。

灯油ランプの炎は、芯の形に敏感に影響を受ける。綺麗な炎にするには、芯も細心の注意を払って整える必要があると教えてもらった。小樽で出逢ったランプは旅行鞆に収まり、今自宅の食卓にある。

時々火を点けては、芯から立ち上る炎を、只無心に眺めている。



『 iPad買っちゃいました 』
(株)アスリック プロジェクト推進部 五十嵐 政信

5月号のアスリックニュースの最後で、「iPadは買いだな」と書いたのだが、予約開始日の5月10日に予約して本当に手に入れた。これ、思っていた以上にすごい。このことを実感したのは、小学校6年生の次男坊にちょっと貸した時だった。

無料のアプリ(iPadで使えるいろんなアプリケーションソフト。無料のものも多くある)を30本ほどダウンロードしておいたのだけど、マニュアルも何もないのに10分もしないうちに完全に使い切っている。しかも僕も知らないような使い方をしている。

そういえばゲームには分厚いマニュアル何か付いていない。でも子どもたちは買ったその日からゲームを使い切っている。

実はiPadにもマニュアルらしきものは付いていない。iPhoneも同じだ。一方日本の携帯電話やパソコンにはご丁寧な分厚いマニュアルがついている。あのマニュアルを見た瞬間、こりゃ使えないわ・・・と断念する人達が、iPadは簡単に使えてしまう。ここがその凄さだと思う。

iPadがなぜ簡単に使えるのか?その理由はキーボードがないという事だ。コンピュータが使えない人=キーボードが使えない人=幼稚園児~小学校低学年児&老人&デジタルデバイドおやぢ&おばちゃんなのだと思うけど、これらの人達が簡単に、直観的に使える。それがiPadだ。おそらく僕の今年78歳になる僕のお袋でも使えると思う。

これが5万円しない。あと数年するとアップル以外からも良く似た機能のiPadもどきが出てくるだろう。そしてそれは3万円を切る価格になるかもしれない。これはすごいことになる。おじいちゃん、おばあちゃんと孫たちがこの新しいデバイスを通してコミュニケーションし始めるだろう。そして、老人と子供たちがつながり始まる。老人同士もつながり始まる。こんな世の中が後しばらくすると実現する。革命的な事が起りそうな予感がする。

テキスト、写真、映像・・・こういったものが有機的につながり、簡単に扱えるようになる。おそらくテレビを見るより簡単に。最近のテレビとDVDのリモコンは、正直言って僕も扱いかねている。こんなことがiPadでは起こらないのだ。

そしてリアルタイムにネットを通してコミュニケーションできるようになる。おそらく新しいビジネスチャンスが山のように出てくるだろう。一方で、対応できずにビジネスの場から撤退せざるを得ない企業や人も出てくるだろう。

むちゃくちゃ面白い時代がもう目の前まで来ている。

『 ワールドカップ 』
SOS代表 川畠 嘉浩

前は確か「メジャーリーグ開幕」だったような。スポーツネタ続きですいません。ですが、4年に一度の祭典ですのでご容赦ください。さすがに今回は治安の悪い南アフリカなので、「現地に行って!」というモチベーションは起こらないのですが、夜中にテレビの前に陣取る日々が続いております。本日は6月16日。そう2日前に日本がカメルーンを撃破したばかりです。そして決勝ゴールを挙げたのが、石川の星陵高校出身の本田圭祐選手とくれば、石川県を愛する私としては二重の喜びなのです。とまあ、若干テンション高めで原稿を書いております。

さて、今回は「ワールドカップから学ぶ」についてお話しします。単にサッカーを純粋に楽しむのはもちろんなのですが、それ以外にもワールドカップには様々な顔を持っています。例えば「国と国の銃を使わない戦争」「ヨーロッパのビッグクラブにとって有望選手の見本市」「FIFAおよびグローバル企業における市場開拓戦略」等々です。コンサルタントのはしくれとしては、あえて以下のような意味づけをしてみました。それは、「組織化と個性の矛盾」です。(かなり無理あるなあという声が聞こえます)

ワールドカップでは、昔であればベレ、クライフ、マラドーナ、近年ではジダン、メッシ、C・ロナウドといったスーパースターのプレーを楽しみにしているファンも多いはずですが、そのスーパープレーもチームとしての勝利に結実するものでないと、「傲慢なプレイ」とされてしまいます。クラブチームと違い、熟成期間が短く、負けたら即終了の代表チームにおいては、勝利に向けたチームとしての決めごとや戦術の必要性が特に高まります。日本が格上のカメルーンに勝利できたのもチーム戦術の徹底にあります。90年以降のワールドカップでは特にチームの組織化や優れた戦術というのが重視されてきており、86年大会の「マラドーナの5人抜き」のような伝説は生まれにくい状況ではあります。

そこで皆さんに質問です。ワールドカップにおける顧客とは誰なのでしょう?またその顧客のニーズは何でしょうか?私は顧客を「世界のサッカーを愛する人」、もっと拡大解釈すれば「ワールドカップという世界最大のイベントに酔いしれたい人」ではないかと考えられます。とするとニーズは「驚愕のプレイ」、「エキサイティングなゲーム」となります。果たして今回のワールドカップはそれを満たしているでしょうか?相手の出方を探る怠惰とも取られ兼ねないゲーム進行、プレイヤーを無視した技術先行のボール、誰が出ても戦術に支障をきたさない没個性化したプレイヤー等々。正直満たしていないですね。

私の仕事上の立場から言えば、「リスクを最小限に抑え合理化を追求する」というのは、勝ち続ける組織としては必要不可欠な要素ではあります。しかし、ある種矛盾するかもしれませんが「組織という枠組みを超越した、すさまじい個性」私はそこにどうしてもたまらない魅力を覚えます。本田選手が注目されるのもそういう事が背景にあると思います。

サッカーに限らず、企業においても個々人が目の前の問題・課題を開閉していく力を持つ。その個人の集合体が組織であり、それは単なる枠組みに過ぎません。グローバル経済・社会の世界においては、日本人という同じ文化・コミュニティは意味をなくします。多様な人種、文化、価値観を持つ人々との協働に迫られます。そんな時代において、強い組織とは、まず「強い個人の集合体」であるべき。その上でシナジーを生むための「組織化」していく。組織化も、従来の「垂直的階層化」ではなく「水平的ネットワーク化」が求められます。そして、一人ひとりが「地球人」として自分が何者かを認識しなければいけません。個々人にアイデンティティが必要となるわけです。

ワールドカップを見ていると、ついついそんな事を考えてしまいます。ホント大変な時代です。そんな私は、能登で純粹培養されたコテコテ日本人です。難しいことはワールドカップが終わってから考えることにします。ガンバレ日本!

編集者注:本原稿は6/17に頂戴しておりました。

寺子屋体験が終わるといよいよ三日坊さんの旅のキャッチコピー「お坊さんの日常生活を体験し、新しい自分を発見してみませんか？」の日常生活の体験だ。その2で紹介した可睡齋に戻り、まずは法話から始まった。「可睡齋を禅の修業道場であることを認識して参禅してください。」

身だしなみを整え、時間を守り、他人に迷惑のかかる自分勝手な行動はしない、は俗世間でも当たり前なこととして、この道場ならではのルールの説明があった。三ヶ所、特に話をしてはいけない場所があると言うのだ。まずは、座禅、食事、

就寝の場である僧堂、次に東司（トイレ）、最後に浴司（浴室）。これじゃ全てではないか、修行の場におしゃべり無用というわけだ。



そして基本的な姿勢が叉手と合掌である。合掌はともかく叉手というのは左手親指を中にして握り、右手をその左の握りこぶしの上に重ねてみぞおち辺りにおく。歩行時は手をぶらぶらさせないで叉手でということだった。そして廊下で人とすれ違う時には合掌し頭を下げる。板張りの綺麗に磨きこまれた東司

（トイレ）の使うには、まず中央に祭られている烏菟沙摩明王に合掌低頭からだ。こうした作法の説明を受けた後、可睡齋の建物の中を歴史含め丁寧な説明を受けながら廻った。

2月の17時はすでに薄暗く、薬石、所謂夕食の時間となった。略応量器と呼ばれる白い布に包まれた食器類が手前に出された。包みを広げ、椀を取り出し、そこにご飯、汁、香菜が盛られた。箸を手

にする前に「五観の偈」を唱える。



「五観の偈」の意味することは、

- ・ この食事の来所に感謝する。
- ・ 食事を受けるに相応しい行いであったか反省する。

- ・ 心の安らぎを得るには、貪り、怒り、愚かさの悪い心の働きを止める。
- ・ 食は心身を養うためのもので良き薬としていただく。
- ・ この食をいただくことは、自分の成すべきことを成就するための心身を養うためである。

儀式のあとにいよいよ食事が始まる。極普通にやっているご飯の椀を持っておかずに箸を伸ばすという食べ方はご法度だ。それぞれの器をいちいち手に持ってひとつずついただいていく。食事は音を立てず、話もせず、皆同じような早さで食を進める。ご飯、汁、おかず全てをまずは一膳いただく、おかわりは同時に行われる。鍋を持った人が目の前に来ると必要であれば椀を差し出し、おかわりの量を手で合図する。声を出さずにたんたん「薬石」という食の修行が続く、いっせいに終了となる。終わると椀に白湯を注ぎ、沢庵で食のかすを拭き取り食べる、もちろん白湯も飲む。食事の中で器も綺麗にしてしまうのだ。極めて合理的な器の組合せであり、作法である。ご飯も汁も、真面目な気持ちのこもった調理をされていることが伝わってきた。ご馳走様、合掌低頭。



食後には、「五観の偈」、粥に十の利点あり「粥有十利」の法話があった。そしていよいよ座禅。姿勢を整え、呼吸を整える。目に映るもの、耳に聞こえる音も、香も、思い浮かぶことも、追わずに放っておく、相手にしない。これが曹洞宗の座禅「只管打坐」ひたすらに座ることに打ち込むのである。「渴！」とは言わないけど警策を受け、固まりかける体をほぐしてもらう、睡魔を払ってもらう。あっという間に30分ほどの座禅を終える。

このあとは入浴、そして21時の就寝となる。翌朝5時起床、おつとめが待っている。中身の濃い「三日坊さんの旅」初日の床に着いた。

編集者注：早合点して先々月「完」と勝手に終わらせてしまい、溝口さんには大変失礼とご迷惑をお掛けしました。心よりお詫び申し上げます。

今月からその続編です。